

第 7 回「日中未来創発フォーラム」(北京) 参加報告レポート

青山学院大学
国際政治経済学部 4 年
田中 花奈

1. 概要

2025 年 5 月 9 日から 5 月 12 日までの 4 日間北京に渡航し、笹川平和財団と中国人民大学との共同開催である第 7 回日中未来創発フォーラムに参加した。生活、文化、教育の三分野について講義を受けたのち、3 チームに分かれてフィールドワークを行い、その成果をプレゼンした。

私は教育チームに参加し、教育現場にも応用できる中国独自の未来の AI 技術を見学した。加えて、フォーラム期間中は現地の中国人学生と寝食を共にした。現地学生と同室で宿泊することで、より密に関わることができた。

2. フォーラムについて

はじめに行われた生活、文化、教育に関する講義は中国語で行われた。中国語のわからない日本人学生のために自動翻訳による字幕が掲示されており、言語が分からなくても内容を掴むことができた。その後行われたフィールドワークでは、私の所属していた教育グループは、中国の AI 技術を見学した。2 つの企業を見学したが、どちらも今までに見たことのない AI やデジタルの技術を有しており、衝撃を受けた。

見学後は、少人数のグループメンバーと「中日協働による AI 教育イノベーション戦略」についてディスカッションを行った。フォーラムのプログラムの中でも、特にこのディスカッションが印象的であった。参加者はそれぞれ異なるバックグラウンドを持っており、受けてきた教育の質も異なっていた。そこで、中日両国の教員が共に時間外業務に悩まされていることをなどを知った。中でも印象的だった事象が 2 つある。1 つ目は教員と保護者との距離感だ。中学では、休日や放課後にも We Chat などを通して教員と保護者がやりとりを行うことが珍しくないのだという。次に、幼い頃から質の高い教育を求める姿勢だ。ディスカッションに参加した中国人学生の中には、幼い頃からより学習環境の整ったに通う為に車で片道 40 分程の学校に通学していた学生もいた。私自身、中学校までは区域で決められた公立校に通っており、日本ではそこまで幼い頃の環境を重視するケースを初めて聞いたため大変驚いた。

議題に対する答えとしては、「AI 技術を用いて教員の業務負担を軽減する」「AI 技術を用いて教育の地域格差を解決する」という 2 点に至った。企業を見学した際に目にした自動採点システムを

導入したり、人工知能によって生徒一人一人に合ったキャリアプランを提示したりする事で、教育現場でイノベーションを起こせるのではないかと考えた。中日協働という面においては、互いの技術や実際に導入してみてものデータを共有する事で、互いに学び合い高め合っていけると考えた。

ディスカッションの最後には、deepseek と呼ばれる AI 技術を用いて発表資料を作成した。完成した資料は日本でよく使用される chat gpt を用いて作成したものに比べてクオリティが高く、中国の技術力を身をもって実感した。

3. 参加前と参加後の変化について

このフォーラムに参加する前の私が思い描く中国は、日本のメディアが発信するものそのものだった。生活環境は日本と大きく異なっていて不便を感じる事が多かったり、道端で日本に対してマイナスな印象を持っている人から何か攻撃的な発言を浴びたりする事もあるのではないかと、正直不安要素が多かった。しかし、実際に中国に降り立ち現地の人々と交流してみると、メディアではあまり伝えられていない人々の温かさがあった。現地学生のみなさまも暖かく迎えてくださり、楽しく訪中期間を過ごす事ができた。中国語のままならない私の為に店員さんとの会話を通訳してくれたり、会話を伝わりにくい事があると翻訳機で伝えようとしてくれたり、心配りに大変助けられた。

4. フォーラム全体を通して感じたこと

フォーラム全体を通して、日中関係に興味関心を持ち、互いに友好関係を築きたいと考える学生の熱量に感銘を受けた。どの学生も外部からの情報を受け身になって待つのではなく、人との交流を通して自ら掴みに行くことに貪欲である姿勢が見てとれた。現地で出会った日本人留学生の学生たちも、目的を持って楽しく留学生生活を過ごしていると話してくれ、私自身の今後の学びに対する姿勢を見つめ直す機会となった。

また、現地の中国人学生の日本語力の高さに驚かされた。最近日本語を学びはじめたという日本語学科1年生の学生でも、日本語である程度のコミュニケーションをとることに問題がないことが印象的であった。その為、挨拶程度しか中国語ができない私にとって、彼らの日本語力が大変心強かった。ディスカッションや発表の際も、使用言語が日本語であるにも関わらず積極的に発言をし、意見をまとめてくれた事でスムーズに議論を進める事ができた。

5. 終わりに

今回、このような機会を頂けたことを大変光栄に思います。私にとって初めての訪中がとても意味のあるものになりました。末筆ながら、この場をお借りして笹川平和財団の皆様をはじめ、この会の開催にご尽力いただいた全ての関係者の皆様に心より感謝申し上げます。